

松 山 大 学 論 集  
第 22 卷 第 5 号 抜 刷  
2 0 1 0 年 12 月 発 行

## 中央アジアのエネルギー資源をめぐる中口関係

馬 紅 梅

# 中央アジアのエネルギー資源をめぐる中口関係

馬 紅 梅

## はじめに

中央アジア五カ国（カザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、キルギスタン、タジキスタン）は欧州とアジアを結ぶ戦略的要衝地であり、また、石油や天然ガスなどのエネルギー資源の埋蔵量が豊富で、「第2の中東」と呼ばれる地域でもあるゆえに、域外の大国の競争の重要な目標となっている。

中央アジア地域のエネルギー資源開発は旧ソ連時代から始まり、その採掘と輸送インフラは旧ソ連のエネルギーネットワークの一部となっている。ソ連の崩壊後にも、中央アジア諸国の石油や天然ガスの輸送はロシアを経由しなければならない。中央アジアエネルギー輸出におけるロシアの独占的な地位を揺るがしたのは、1990年代前半の米系メジャーの進出である。90年代の半ばごろ中国の石油会社も中央アジアへの進出を始めた。ロシアと米国と比較して、中国の中央アジアのエネルギー市場の参入は遅れていたにも拘らず、短期間に地歩を固めてきたことで、注目の焦点となっている。

本稿では、まず中国の中央アジアエネルギー資源分野への進出の背景と目的を説明し、それからその実績を紹介し、中央アジアのエネルギー資源をめぐる中口の思惑を明らかにする。最後に中国の中央アジアエネルギー資源確保の困難をまとめ、進出の成果を検討する。

## 1 中国の中央アジアエネルギー資源分野への進出

1991年中央アジア諸国は独立を達成した時点では、中国は国内のタリム盆

地の油田開発に期待をしていたので、中央アジアのエネルギー資源には関心を持っていなかった (Tang [2000])。

1993年となると、状況が一変した。タリム盆地の油田開発は期待はずれになったほかに、中国は予想よりも早く石油の純輸入国となった。経済の高度成長でエネルギー需要が急増している中国は、国内原油生産の頭打ちという問題に直面し、外部から石油を確保しなければならなくなった。その時点から中国は中央アジアのエネルギー資源を重視するようになった。

中国のエネルギー安全保障にとって中央アジアが重視された理由はいくつかある。まずは、中央アジアからのエネルギーをもって中東石油を代替できると思っているからである<sup>1)</sup>。中東地域の政治情勢不安定で石油の供給が減少し、また途絶えるという懸念がある。一方、中央アジア地域では推定石油埋蔵量が豊富で (世界全体の推定石油埋蔵量の約1~2%を占めている)、また膨大な天然ガスの埋蔵量も確認されている。北海油田の石油・ガスの埋蔵量とほぼ同じであると推測されている (Dorian [2006])。採掘技術、開発資金、政治面などの難点で、北海油田ほど生産的ではないとしても、2010年にカスピ海での原油生産量は北海の60%に匹敵し、天然ガスの生産も2010年に年産2兆1,000億立方メートルで、世界消費量のおよそ2~3%を占めると予想されている。数値としては大きくはないが、ほかの地域での生産量が落ちたときに代替供給源になれるために重要性を増している。

2点目は、輸送ルートの安全性である。陸続きのパイプライン輸送は中国のパイプライン輸送は、原油タンカーによる中東、東南アジア、アフリカ、ラテンアメリカからの輸入と比べ、シーレーンを経由せずにすむところは中国のエネルギー安全保障と経済発展にとって戦略的な意味を持っている。中国は原油タンカーを守るための遠洋海軍を持っておらず、また近い将来に建設することができないので、海上ルートでの輸入は米海軍の管理下に置かれているシーレ

---

1) 2007年中国の原油消費量は10年前の約2倍の3億4,600万トンに達し、中東などからの輸入比率は46%まで上昇した。

インを経由しなければならない。一方、中央アジアは中国の新疆ウイグル自治区と陸上で連なっている。鉄道、トラック、およびパイプラインによる輸送も可能である。輸入ルートの多元化によって、中国はエネルギー供給の安定を確保しようとしている。

3点目は輸入先の多様化によるリスクの分散である。中国は安全な供給ルートを確認したいだけでなく、供給源の多様化により、リスクを分散しようとしている。基本的に中国は国際市場での原油取引を好まず、海外の上流事業への進出に積極的である。中国の石油会社は油田の直接の投資者になるか、あるいは株主になるか、自主開発原油の確保に重点を置いている (Andrews-Speed and Vinogradov [2000] p. 390)。国際エネルギー資源開発の後発参入者として、中国は、すでにメジャーによって押さえられている中東地域よりも、自然にまだ流動的である中央アジアに視線を向けるようになった。さらにカスピ海油田開発への足場を確保するために、中央アジアという戦略的要地に関心を寄せている。

以上の理由で、天然資源が豊富な中央アジア諸国との協力関係を強化することでエネルギーの確保と優先権を得る狙いは、中国にはある。

一方、中央アジア諸国も中国へのエネルギー輸出に興味を示し、積極的に中国とのエネルギー協力を展開している。中央アジア諸国は豊富なエネルギー資源を持っている。しかし、いままで石油と天然ガスの輸送ルートはロシアに依存しているため、ロシアによってエネルギー資源を安く買い取られ、また高くヨーロッパに売られるのを受け入れざるを得なかった。カザフスタンの原油の例を挙げてみよう。カザフスタンの原油はロシアの西シベリアの原油と比べると、硫黄分が少なく、比重が軽いので、国際市場でより高い価格で取引されている。ロシアはパイプライン輸送を利用して、カザフスタンの原油とロシアの原油を混ぜて、「ウラルブレンド」と名づけて、国際市場で売却することによってロシア側に大きな利益が入る (Kimberly [2006])。天然ガスに関しても、ロシアはカザフスタンからの低価格購入と欧州への高価格転売から 150%の利益

を上げている (Melissa [2007])。上記の事情を踏まえて、中央アジア諸国はロシアを経由しない輸出ルートを確認する動機を強く持っている。

## 2 中央アジアのエネルギー分野への進出

### 2.1 石油

中国の中央アジアの石油分野への進出の最大な目標はカザフスタンである。中国企業のカザフスタンへの進出は、1997年6月に中国石油天然ガス集団公司 (China National Petroleum Corporation, 以下ではCNPCと略す) がカザフスタン政府の財政部民営化局からアクトベムナイガス (Aktobemunaigaz) の60.3%の株式を取得したことから始まった。2003年6月CNPCは同社のカザフスタン政府の所有する25.12%の株式を買い取り、アクトベムナイガスの85.6%の株を持つようになり、同社を全面的に引き継いだ。その後、CNPCは北ブザチ (North Buzachi) 油田の100%の権益を取得した (Peyrouse [2008])。

2005年CNPCはペトロカザフスタン (PetroKazakhstan Inc, 以下ではPKZと略す) 買収<sup>2)</sup> など、積極的にカザフスタンのエネルギー資源開発案件に参加してきた。

2006年10月25日に中国中信集团公司 (China International Trust and Investment Company, 以下ではCITICと略す) と Nations Energy<sup>3)</sup> と Nations Energyのカザフスタンで所有するすべての資産を買収することに合意した。2006年12月31日にCITICは買収に成功したと宣言した。2020年まで14年

---

2) 2005年8月CNPCは、インドの石油天然ガス公社 (Oil and Natural Gas Corporation) と競った結果、カザフスタンに油田の権益を持つカナダのPKZ社 (旧名Hurricane Hydrocarbons。2003年PKZに改称) を買収すると発表した (買収金額は41億8,000万ドル、ペトロカザフの原油生産量はカザフスタン全体の12%に相当する日量15万バレルで、可採埋蔵量は5億5,000万バレル。油田開発から精製、販売まで一貫して手掛けている)。しかしカザフスタン国内で中国への警戒感が強まり、CNPCはPKZの株式33%を14億ドルカザフスタンの国有石油会社KMGに売却した。

3) Nations Energyはカナダ企業だが、主要資産はカザフスタンのカラジャンバス (Karazhanbas) 油田 (生産量は日量5万バレル) である。Nations Energyの保有する埋蔵量は約3億4,000万バレルである。

間の採掘権を手に入れることになる。その後、カザフスタン政府の承認取得に時間がかかった。しかし、最終的に、カザフスタン国営石油天然ガス会社カズムナイガス (KazMunaiGaz, 以下では KMG と略す) は Nations Energy の 94.6% を保有する子会社 Karazhanbasmunai 株式の 47.3% を取得するオプションを得た事により、カザフスタン政府の承認が下りた。KMG はオプションを行使し、CITIC の買収価格にもとづき、資本参加を果たした (鄭 [2007] p. 300)。

北カスピ海沖ブロック開発プロジェクト (North Caspian Sea Project) は、2003 年にスタートしたが、撤退を余儀なくされた後に、2005 年に成功した。2003 年 3 月、中国石油化工集团公司 (China Petrochemical Corporation, 以下では Sinopec と略す) と中国海洋石油総公司 (China National Offshore Oil Corporation, 以下では CNOOC と略す) はイギリスの BG International 社<sup>4)</sup> からカザフスタン北カスピ海沖合のブロック権益の 16.67% を買収することで合意した (China Daily, March 12, 2003)<sup>5)</sup>。ただし、コンソーシアムのルールでは、この契約が発効する前提条件は 60 日以内に既存利益保有者が株購入の優先権を行使しないことである。しかし国際メジャーの Shell, Eni など既存利益保有者が優先権を行使したことで、Sinopec と CNOOC の買収計画はここで失敗に終わった (Asian Times, February 9, 2005)。

2005 年となると、また転機が訪れた。2005 年 5 月にカザフスタンはイギリスの BG グループから Agip KCO 財団の中の所有している 16.67% の権益を取得した。この権益はちょうど 2003 年 Sinopec と CNOOC の求めていた権益である。カザフスタンの WTO 加盟の中カ交渉パッケージの一環として、2005 年の 9 月に中国の石油会社のカスピ海の原油開発事業はまた新しい兆しが見え

---

4) BG グループの売却理由は、会社はもともと天然ガスの会社であったために、石油関連の事業を整理し、本業の天然ガスのビジネスに専念したいからである。

5) BG グループは北カスピ PSA 探鉱区保有権益 16.67% のうち、2003 年 3 月 7 日に CNOOC に 8.33% を 615 百万ドルで売却することを発表した。その 4 日後の 2003 年 3 月 11 日には、同じく中国企業である Sinopec に 8.33% を 615 百万ドルで売却することを発表した。

た。中国とカザフスタン政府との間に、Sinopec, CNOOC とカザフスタンの国有石油会社 KMG と共同でカスピ海の Darkhan 鉱区の共同開発の覚書に署名した (鄭 [2007] p. 301)。

さらに、中国にとっての快挙は中国とカザフスタンとの間の石油パイプラインの開通である。1997年9月当時の李鵬首相とカザフスタン政府と石油パイプラインの建設契約に調印した。1997年から1999年にわたりフィージビリティ・スタディーが行われた。予定されていたパイプラインの長さが約3,000キロメートルにも及ぶもので、複雑な地形を通るので非常にコストのかかるものである。中カ両国は共同で、パイプラインの建設費7億ドルを提供した。

2005年12月に開通したのはその一部の約1,000キロメートルの部分である。まだ、カザフスタンのカスピ海にある油田とは繋がってはいない。第1段階であるアティラウ～ケンキヤクの間は2003年に操業を開始しており、現時点ではケンキヤクからアティラウという向きで原油は逆流している。2005年12月末時点で第2段階アタス～アラシャンコウまでの工事が終了している。2006年の5月25日、中国とカザフスタンを結ぶ石油パイプラインで中国へ石油の輸送が正式に始まった。中国は初めてパイプライン方式で原油輸入を始めたという歴史的な意味を持つ。このパイプラインの年間輸送能力は設計ベースで2,000万トンである。両国間の合意によると、パイプラインの稼働当初の年間輸送量は1,000万トンで、2010年までに2,000万トンに増やす。カザフスタンとロシアは、原油輸送量の半分ずつを提供する<sup>6)</sup>

最終段階にあたるケンキヤク～クムコル (カザフスタンのカスピ海にある) 間の建設工事が完成できれば、カスピ海の原油は中国へ直接輸送できる。

このパイプラインはカザフスタンにとっては、第三国を経由しないで直接に原油を輸出できる初めてのルートであり、まさに戦略的な意味を持つパイプ

---

6) 「人民網日本語版」2006年5月25日「中国-カザフ石油パイプライン、25日から正式稼働」<http://www.chn-consulate-sapporo.or.jp/jpn/xwdt/t254906.htm> 2009-05-26 アクセス。

インである。

## 2.2 天然ガス

天然ガスに関しては、トルクメニスタンは中国の重要なパートナーである。1998年トルクメニスタンのニヤゾフ大統領は中国に天然ガスを輸出したいという意向を示した。2000年7月中国の石油代表団が初めてトルクメニスタンを訪問し、トルクメニスタンの副首相グルバンムラドフと会談し、天然ガスの輸出に関する覚書に調印した。2006年4月にニヤゾフ大統領が訪中の際に、トルクメニスタンは中国との生産分与協定（production-sharing agreement）に調印し、また中国への天然ガスの輸出に合意した。さらに2006年の合意では、2009年からの30年間、年間300億立方メートルの天然ガスを輸送する7,000キロメートルのガスパイプラインを建設する（Eurasianet [2008]）。CNPCはこのプロジェクトのオペレーターである。トルクメニスタンと経由国のカザフスタンとウズベキスタンは当該国を経由するパイプラインの50%の所有権を持つ。現にパイプラインは三カ国で建設されている<sup>7)</sup>。2009年の1月にパイプラインの完成が予定されている（鄭 [2007] pp. 301-302）。

2006年の11月にCNPC傘下の採掘会社長慶（Changqing oil exploration department of CNPC）がトルクメニスタンの国有地質会社TurkmengeologiaとSouth Iolotan油気田の12の油井の開発サービスを提供する1.52億ドルの契約に調印した（New Europe [2008]）。そのほかに、中国はトルクメニスタンの油田の再開発にローンを提供した。

中国はウズベキスタンとの天然ガス協力にも積極的であった（鄭 [2007] p. 302）。2005年5月26日カリモフ大統領の4回目の中国訪問の際に、CNPCはウズベキスタンとエネルギー開発に関して6億ドルの契約に調印した（RFE/RL [2006]）。

---

7) パイプラインの長さは、カザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタンにそれぞれ1,300キロ、530キロ、188キロである。

2006年6月8日、北京で中国の石油天然ガス探鉱開発会社はウズベクネフテガス (Uzbekneftegaz) と共同で3.4キロ平方メートルにわたる5つの陸上の鉱区の探鉱契約に調印した。2006年の8月30日に中国の石油天然ガス探鉱開発会社と、ウズベクネフテガス、ロシアのルクオイル (Lukoil)、マレーシアの石油会社および韓国の石油公社がアラル海コンソーシアム (Aral sea consortium) を結成し、共同でアラル海の西部の Ustyrt 鉱区の開発に乗り出した (鄭 [2007] p. 302)。

### 3 中央アジアのエネルギー分野への進出の困難

#### 3.1 ロシア

中国の中央アジアへのエネルギー分野への進出に関して、ロシアとの間に利益の衝突が生じる。中国はエネルギー消費大国で、ロシアはエネルギーの輸出大国で、一見して、相互依存関係が成立するわけである。しかし、中国の中央アジア進出に関して、ロシアは望んでいなかった。モスクワ国際関係大学教授 Alexei Malashenko によれば、ロシアを經由しないエネルギーパイプラインは「クリムリンの最悪の悪夢」であると指摘されている。というのは、ロシアの中央アジアに対するレバレッジが減少させられただけではなく、ロシアのエネルギー超大国になる可能性も小さくなるだろう (Malashenko [2007] p. 17)。

ロシアはいまサウジアラビアに次ぐ2番目の石油輸出国である。世界の需要増加、価格上昇とユーラシア大陸の真ん中の位置などに恵まれ、ロシアはエネルギーの超大国としてエネルギー資源に戦略的な意味を見出している。ソビエト崩壊の10年後にロシアはエネルギー資源の輸出で復活を果たした。西側諸国との関係悪化につれて、ロシアは外交面、エネルギー面でも中央アジアを重視するようになった。

ロシアは中央アジア産の原油をすべてコントロールすることによって、いざというときに、政治的な目的で原油輸出を停止することができる。また輸出入の確保に関しても、中央アジアのエネルギー資源はロシアにとって重要であ

る。ロシアの油田は短期的な利益のために、過剰採掘され、また将来の生産のための投資が不十分な状態で、石油の減産が遅かれ早かれおとずれる。それと対照的に、カザフスタンの油田は相対的に環境保全型の新技術が採用され、よく多くの原油が生産できる。

天然ガスに関して、ロシア輸出量の約2割は中央アジアからの輸入に依存している。ロシア既存の国内ガス田は、生産頭打ちの状況で、今後中央アジア産のガスへの依存が高まると予想されている。ロシアは、外資を受け入れて新規ガス田開発を進めないと、輸出契約の履行が難しくなりそうである。国際エネルギー機関 (International Energy Agency, IEA) の報告書によれば、旧ソ連邦時代からの主力ガス田の生産は過去5年間に約15%減少、2001年に生産を始めた西シベリアのガス田の増産が減少分を埋めてきたが、そこも2005年にピークを迎え、やがて生産量が落ちる。他のガス田開発のメドはまだ立っていない。このような状況のもとでロシア政府は中央アジアの天然ガスを確保したい動機が働くのは不思議ではない。

中国の石油企業が中央アジアのエネルギー資源を獲得しようとしたときに、ロシアの企業の妨害にも遭った。その典型的な事例はルクオイル社がCNPCのPKZの買収の際にとった行動である。2005年10月PKZの資産は中国のCNPCによって買収されたさいにルクオイル社はCNPCによるPKZ買収の反対訴訟を起こした。1996年カザフスタン政府はKomkol油田を二分割して、南Komkol油田をPKZ社に売却した。北Komkol油田はルクオイル社とPKZ<sup>8)</sup>社へ、それぞれ所有権の50%を売却した。カナダの法廷でルクオイル社の買収反対訴訟は敗訴となったにもかかわらず、一連の訴訟のあと、ルクオイル社は北Komkol油田の所有権を手に入れた (Blank [2005]a p. 108)。

私的企業の活動とロシア政府の活動を混同すべきではないが、しかし、ルクオイルのケースは特殊である。ルクオイル社の社長ヴァギト・アレクペロフ

---

8) 注2を参照せよ。

(Vagit Alekperov) はソビエト時代の最後の石油ガス工業相の第一次官であり、民営化のときに、その地位を利用し、うまみのある油田を自社の傘下に収めた。彼はロシアの中央権力に近く、インタビューで「われわれの利益は一致している。ロシアにとっていいことはわが社にとってはいいことである。わが社にとってのいいことはロシアにとってもいいことである」と答えていた (Kimberly [2006] p. 3)。

一部のアナリストは中央アジアのエネルギー資源をめぐる中口の競争は、ロシアが欧米企業と手を組んで中国と対抗する可能性もあると、分析している (Wallander [2004] p. 103)。

### 3.2 中央アジア諸国

中央アジア諸国は中国とのエネルギー協力に関して、中国を単なるロシアとの交渉のカードとして利用するのか、それとも本気で自国の天然資源を中国に売却するかどうか、疑問が残っている。

中央アジア諸国にとってロシア以外のエネルギー市場の開拓が重要な課題である。各国ともロシアのパイプラインに依存し、価格決定権がロシアに握られていたため、ロシアを経由しないパイプラインを建設し、ロシア依存を軽減したいという考えをつよく持っている。しかし一方で、諸国はエネルギー資源の自主開発に関して、資金と技術不足といった難問に直面している。さらに政治、経済、安全保障などのロシア依存を鑑み、中央アジア諸国の政府は引き続き、ロシアのエネルギー分野における支配的な地位を容認せざるをえない。ロシアの機嫌を損なうのはやむをえないとしても、なるべくロシアを敵に回さない範囲内で、代替のパイプラインを建設し、ロシアの支配を弱めることを努める。例えば、カザフスタンの政府は、ほかの外国企業との取引の際に、常にロシアの石油・ガス会社の資本参加を受け入れている。トルクメニスタンも似たような行動を取っている。トルクメニスタンはアフガニスタン経由でパキスタンまでのパイプライン、イラン経由でペルシャ湾までのパイプラインの建設に

ロシアの企業を参加させている。ロシアをプロジェクトに関わらせることによって、この地域の内外の関係を平和的に保つことができると考えられているからである (Luong [1997])。

カザフスタンのナザルバエフ大統領は2007年4月9日のテレビのインタビューの中で、カザフスタンの原油輸出は冷徹な経済的利益の計算に基づいて行われていると強調していた (Lillis [2007])。「ロシア経由で原油輸出が有利であれば、われわれはそのルートを取る。もし Baku-Ceyhan 経由の輸送が15ドルよりも安い場合、われわれはそのルートをとる。両方とも不利な場合には、われわれは中国のほうへ輸出する」。言うまでもなくこのような発言を額面通りに受け取るわけにはいかない。2007年5月12日にナザルバエフ大統領は、カザフスタンはこれからもすべてのガスをロシア経由で輸出し、またその原油の全部でなくてもその大半をロシアの領土を経由して輸出すると発言した (Melissa [2007])。この発言は、プーチン大統領がカザフスタンとトルクメニスタンを経訪した際に、なされたのである。一方、2007年5月のトルクメニスタン、ロシア、カザフスタンの三ヶ国の首脳の間で、ロシアはトルクメニスタンとカザフスタンとの間に天然ガスのパイプラインの建設に調印した。2009～2010年まで100億立方メートルの天然ガスを輸送するパイプラインである (Radio Free Europe/Radio Liberty [2007])。

中国にとってもう一つの不利な要因は中央アジア諸国の間で高まってきた「中国脅威論」である<sup>9)</sup>。カザフスタンで運営している中国企業は現地人への傲慢な態度、労働政策、経済浸透、中国労働者による土地の私有化などの懸念などで、現地の対中感情はけっしていいとはいえない (Blank [2005]a p.105)。

CNPCによるPKZの買収の際に、カザフスタンの議会の抵抗にも遭った。カザフスタンの議会は急ピッチに立法を進め、売却認可の権限をカザフスタン政府に付与した (Yermukanov [2005])。カザフスタンの国有石油会社 Kazmunigaz

---

9) 詳細は鄭 [2007] の第五章を参照せよ。

はCNPCからPKZの一部を獲得することにも意欲的であった。最終的に、CNPCの南Komkol油田の所有株の50%をカザフスタンのほうに引き渡した(Blank [2005]a p.108)。また2000年にPKZに買収されたShymkent製油所も再びカザフスタン政府に戻された(Shiryaevsкая [2006])。カザフスタン側も自国の戦略的資源を中国資本に渡したくないのが明らかである。

中国とカザフスタンのパイプラインはほとんど中国側の出資にも拘らず、そのいかなるパイプラインもの50%の所有権をカザフスタンの国有会社に所有されている。

さらに、中央アジア政府は永久的に資源供給国の地位にとどまってしまふことを深く憂慮している。2005年2月18日の教書演説では、ナザルバエフ大統領は「今日、われわれは超大国がこの地域における経済的支配を競争しているのを目の当たりにしており、このグローバルと地経学的挑戦を正確に対応しなければならぬ。われわれはグローバル市場の原材料提供国にとどまり、次の帝国の台頭を忍耐強く待つか、それとも中央アジア地域に真の意味では経済統合を追求するか、という選択肢に直面している。わたしは後者を選択する」と発言している(Blank [2005]b)。

#### 4 中国の中央アジアのエネルギー分野への進出のバランスシート

中国では、中国の企業が中央アジアでの石油資源確保において大きな成果をおさめていると、伝えられている。しかし、専門家の間では、中国の中央アジアのエネルギー進出に関して、成功しているものの、限界があるとの評価が一般的である(Blank [2005] a, Schicor [2008] p.72)。

まずはカザフスタンの油田開発に関して見てみよう。中国は遅れて参入していたために、辺鄙な鉱区だけ獲得した(Sebastien [2008])。権益取得の際に、カザフスタンとロシアの圧力で、中国はシェアの一部を放棄せざるを得なかった。

2点目、中国とカザフスタンとのパイプラインは開通したものの、このパイ

ラインに輸送能力を満たせるほどの原油は果たして供給できるかという疑問がある。カザフスタンは2006年に5,700万トンの原油を輸出したが、その中の5.3%（およそ300万トン）は直接中国へと輸送された。170万トンはアタス～アラシャンコウパイプライン経由で、130万トンは鉄道で、合わせて、2006年の中国の原油輸入の1.5%をしめている。2007年にこの数値は増大した。それにしても、カザフは2007年の原油輸出の7%（およそ2007年の中国の原油輸入の2.8%）に過ぎない。パイプラインの輸送能力の40%しか利用されていない。カザフスタンは採算性が合わないため冬季に封鎖すると考えているが、一方中国のほうはカザフスタンが2011年までにパイプラインの輸送能力を倍増する約束を遵守できるかと懸念を抱いている（Schicor [2008] pp. 69-70）。

これにも拘らず、中国は、中央アジア、とくにカザフスタンを、不安定な中東地域にかわる原油供給先としてみなしている。

3点目、中国は輸入源の多様化が成功したとも言いがたい。ロシアの2つの石油会社 TNK-BP と Gazprom Neft とカザフスタンの Kaz Trans Oil と契約を結び、年に500万トンのロシアの原油を Omsk-Pavlodar-Atasu-Alanshankou 線経由で中国に供給することに合意した。2008年の最初の四半期に、30万トンのロシア原油はこのルートで中国に輸出された（Interfax [2008]）。中国では、公的にこれは中露、カザフスタン三カ国の協力の成功だと高く評価されている。しかし、このような契約内容は中国側の初期の意図とはかけ離れていた。中国はエネルギーの供給源の多様化を図っており、ロシア原油に依存しないためにカザフスタンの原油確保に乗り出したにも拘らず、結局ロシア産の原油に依存するはめになった。さらに、カザフスタン産の良質の原油を手に入れられずに、ロシアの西シベリア原油を買わされることになった。

4点目、トルクメニスタンは中国への天然ガス輸出の約束を果たせるかどうかという問題が残っている。トルクメニスタンの天然ガスの年生産量は700億立方メートルで、60億立方メートルをイランに輸出して、そのほかの620億

立方メートルは Gazprom に輸出している (Matusov [2007] p. 89)。イランへの輸出を 140 億立方メートルまで増やし (Reporting Central Asia [2007]a), またアフガニスタン経由でパキスタンまで年に 150 億立方メートルを輸送する計画もある (Reporting Central Asia [2007]b)。数多くの輸出計画は明らかにトルクメニスタンの生産能力を超えている。トルクメニスタンの生産能力ピーク時でも 800 億立方メートルを超えることはない (U. S. Energy Information Administration [2005])。技術者の不足で急速な開発の拡大が見込めない (Reporting Central Asia [2007]c)。これらの事情を踏まえて見ると、最終的に 300 億立方メートルを中国へ輸送できるかどうかは疑問である。

トルクメニスタンは複数のエネルギー輸出契約を履行するのが難しいと予想される中で、中国への輸出計画を犠牲にする可能性が高い。その理由は単純である。中国は二国間のパイプラインの建設の全責任をとっているからであるため、持っているレバレッジが一番小さい。選択が迫られたときに、トルクメニスタンはロシアとイランよりも中国を失望させる可能性が一番高い (Matusov [2007] p. 93)。

5 点目は投資に見合った収益があったかどうかという問題である。中国企業は、積極的な資産買収により急速に埋蔵量を拡大してきた。しかし、その相次ぐ買収資産の多くは、市場の評価額を大きく上回るものであった。または国際入札のコストの上昇を招き、買収・入札価格を上乗せといった高いコストを払うことになる (郭 [2007] p. 78)。CNPC, CNOOC の経営戦略には収益性よりはむしろ地政学的指向、量的拡大の指向が強い。実際、国営会社は中国政府から需要への対応から計画的な埋蔵量拡大を指示されており、資産買収についても商業ベースのみならず、中国政府の政策的意図が大きく介在することによって進められている可能性が高い (古川 [2003] p. 3)。中国の石油会社による海外の石油確保に投資した金額は 70 億ドルにも上った。しかし、確保した原油は日産 40 万バレルに過ぎない。それと対照的に、米国の石油会社のトップスリーが日産 390 万バレルの油田を押さえている (Burrows and Treverton [2007])

p. 86)。

中国の専門家の一部はエネルギー資源の乏しい中国東部都市と中央アジアのエネルギー資源をつなげる巨大なパイプラインプロジェクトの費用効率性 (cost-effectiveness) を疑っている。理由として挙げられたのは、これらの東部都市はオーストラリア及びインドネシアからの液化天然ガス (LNG) を利用すれば、もっと簡単に安上がりになるからである (Zha [2006] pp. 184-185)。

### むすびにかえて

2006年上海協力機構 (SCO) のサミットで、プーチン大統領によって SCO の中でエネルギークラブを設立するとの提言がなされたが、エネルギー資源をめぐる各国の思惑が交差するなかで、その実現の可能性が非常に低いといってもよいであろう。

また2008年夏のグルジア紛争の後に中央アジアの原油、ガスの大産出国カザフスタンは、いまアゼルバイジャン経由でバクー＝トビリシ＝ジェイハン (BTC) パイプラインに供給している原油を、ロシアのパイプライン経由による供給に切り替えることを検討し始めた。トルコ日刊紙『レフェランス』での関連報道を引用して、友田氏はここから「ロシアとの関係を一段と強化する狙いからだろう」と分析している (友田 [2008] p. 2)。

中国の経済規模の拡大に伴い、国際経済に対するインパクトも大きくなった。急速な経済成長に伴うエネルギー資源、さらに各種原材料に対する需要は急速に強くなっており、石油・天然ガス資源を求めて、機会があれば進出し、確保しようとしている。中国の存在感は日に日に増してきていることは事実である。

中国石油企業が海外戦略展開を行うことは、国際エネルギー市場の既存の秩序を打破し、関係諸国・企業の緊張・警戒及び競争激化を招いてしまった。しかしながら、エネルギー資源の持たざる国として、中国は世界の限られた油田・ブロックへ入札、石油・ガス権益の買収を成功させようとすれば、関係

国・企業の強い懸念を引き起こすことは避けられないであろう。ロシアの裏庭だと考えられている中央アジアへ、中国は資源確保をしたことに対してロシアは不満を抱いている。ロシアは中央アジア諸国の輸出の自由度の向上を阻止する方針で動いている。一方、中央アジア諸国は大国間の駆け引きから自国にとって有利な条件を引き出そうとしている。本稿では欧米の政府と企業の中央アジア進出について触れていないが、実際に中央アジアのエネルギー資源をめぐって激しい争奪戦が繰り広げられている。中央アジアの流動的な情勢は予断を許さない。

### 参 考 文 献

#### 日本語文献

- 郭四志 [2007] 「中国3大国有石油会社の投資・経営戦略と影響について」、『中国経営管理研究』第6号
- 友田錫 [2008] 「フル回転始めたロシアの『裏庭』奪回戦略—グルジア侵攻は「新冷戦」の幕開けか」、『焦点』No. 53, 日本国際問題研究所
- 古川純也 [2003] 「カザフスタン：中国企業がKashagan開発に参入～CNOOC, Sinopec がBGから権益取得へ」  
[http://oilgas-info.jogmec.go.jp/pdf/0/943/0303\\_out\\_j\\_kz\\_kashagan\\_cnooc\\_sinopec.pdf](http://oilgas-info.jogmec.go.jp/pdf/0/943/0303_out_j_kz_kashagan_cnooc_sinopec.pdf)

#### 中国語文献

- 鄭羽編著 [2007] 『中俄美在中亞：合作与競争』中国社会科学文献出版社

#### 英語文献

- Andrews-Speed, Philip and Sergei Vinogradov [2000] “China’s Involvement in Central Asian Petroleum : Convergent or Divergent Interests ?” *Asian Survey*, Vol. XL No. 2.
- Blank, Stephen [2005]a “China, Kazakh Energy, and Russia : An Unlikely Ménage à Trois”, *China and Eurasia Forum Quarterly* Vol. 3 No. 3.
- Blank, Stephen [2005]b “Kazakhstan’s Foreign Policy in a Time of Turmoil,” *Eurasia Insight*, April 27, 2005.
- Burrows Mathew and Gregory Treverton [2007] “A Strategic View of Energy Futures”, *Survival* vol. 49 no. 3.
- Dorian, James P. [2006] “Central Asia : A Major Emerging Energy Player in the 21st Century,”

- Energy Policy* Vol. 34, No. 5.
- Eurasia Net [2008] “Central Asia : Beijing Flexes Economic Muscle Across Region”,  
<http://www.eurasianet.org/departments/insight/articles/pp052908.shtml>
- Kimberly, Marten [2006] “Disrupting the Balance : Russian Efforts to Control Kazakhstan’s Oil”,  
PONARS POLICY MEMO 428, CSIS.
- Lillis, Joanna [2007] “Energy Profits Provide Kazakhstan with Foreign-Policy Heft” Eurasianet,  
<http://www.eurasianet.org/departments/insight/articles/eav041807a.shtml>
- Luong, Pauline Jones [1997] “Strategies for Energy Development in Central Asia : International Implication”, PONARS Policy Memo 022, CSIS.
- Malashenko, Alexei [2007] “Central Asian Mosaics of Russian Policy,” *Nevasimaya Gazeta-Dipkurier*, No. 4, March 2007.
- Melissa, Hahn [2007] “Moscow Achieves Success with Kazakh Oil Deal”,  
[http://www.pinr.com/report.php?ac=view\\_report&report\\_id=655&language\\_id=1](http://www.pinr.com/report.php?ac=view_report&report_id=655&language_id=1)
- Matusov, Artyom [2007] “Energy Cooperation in the SCO : Club or Gathering ?” THE CHINA AND EURASIA FORUM QUARTERLY, Volume 5, No. 3.
- New Europe [2006] “Turkmengeologia to sign USD 152 mln contract with CNPC”,  
<http://www.neurope.eu/articles/67423.php>
- Peyrouse, Sebastien [2008] “Sino-Kazakh Relations : A Nascent Strategic Partnership”, *China Brief*, Volume 8 Issue 21.
- Reporting Central Asia [2007]a “Iran to Buy More Turkmen Gas”, Institute for War and Peace Reporting, June 7 2007.
- Reporting Central Asia [2007]b “Afghans to Sign Up for Turkmen Energy”, Institute for War and Peace Reporting, July 3 2007.
- Reporting Central Asia [2007]c “Engineer Shortage Threatens Energy Expansion”, Institute for War and Peace Reporting, July 17.
- RFE/RL (Radio Free Europe/Radio Liberty) [2006] “Karimov Supposedly Hopes for \$1.5 Billion in Additional Chinese Investment”. June 27, 2006.
- RFE/RL (Radio Free Europe/Radio Liberty) [2007] “Russian, Turkmen, Kazakh Leaders Agree on Caspian Pipeline”, May 12 2007,  
<http://www.rferl.org/featuresarticle/2007/05/09bf853d-a94b-48be-a3dd-937138d0b299.html>
- Schicor, Yitzhak [2008] “China’s Central Asian Strategy and the Xinjiang Connection : Predicaments and Medicaments in a Contemporary Perspective,” *China and Eurasia Forum Quarterly*, Volume 6, No. 2.
- Shiryaevskaya, Anna [2006] “KazMunaiGaz Completes Purchase of Shymkent Refinery from CNPC,” *Platts Commodity News* via China Institute at Alberta University, November 17,  
<http://www.uofaweb.ualberta.ca/chinainstitute/nav03.cfm?nav03=53195&nav02=43876&nav01=>

43092

- U. S. Energy Information Administration [2005] “Central Asia : Natural Gas”, *Country Analysis Briefs*, September 2005,  
<http://www.eia.doe.gov/emeu/cabs/Centasia/NaturalGas.html>
- Wallerand, Celeste [2004] “Silk Road, Great Game or Soft Underbelly? The New US-Russia Relationship and Implications for Eurasia,” in Shireen Hunter Ed., *Strategic Developments in Eurasia After 11 September* (London : Frank Cass Publishers, 2004).
- Yermukanov, Marat [2005] “Kazakh Government Under Fire Over Chinese Takeover Deal,” *Eurasia Daily Monitor*, October 27.
- Zha, Daojiong [2006] “China’s Energy Security : Domestic and International Issues,” *Survival*, Vol. 48, No. 1.

(本稿は、2008年度松山大学特別研究助成制度による研究成果の一部である。)